

大学教育と大学生協の役割

- 学生に読書の習慣をつけさせるために -

庄司興吉（東京大学名誉教授）

Email: kokshoji@nifty.com

◎Key Words 大学教育, 読書リスト, 読書習慣

1. はじめに

学生たちが本を読まず、授業時間外の一日の勉強時間が一時間にも満たないことが問題になっている。最大の原因は、進学率が50%を越えて久しく、大学がすっかり大衆化しているにもかかわらず、大学教育がそれにふさわしい形になっていないからである。

事態を変えるには、まず、大学教員が、現在の大学が一次的に教育の機関であることを認め、必要とされている大学教育に正面から取り組むことであろう。

2. 研究と教育

実態としては、大学教員の多くが、今でも研究が自分の第一の仕事だと思っていて、教育は、軽視しているのではなくとも、二次的なことだと思っているかもしれない。それは大学を、大衆化のなかにあってもなお大学たらしめるレゾナントルであると思うので、いちがいに否定されたり、非難されたりするべきことではない。

そう思う教員たちは、自分の教育を自分の研究のためにできるだけ生かす方法を考えることである。

専門にもよるが、授業はそれ自体が社会的実践の一形態であり、次代を担う若者との生きたコミュニケーションの場所でもあるので、自分の研究のために役立つような授業は、やりようによってはいくらでもできるはずである。

たとえば、私の専門は社会学であり、グローバル化の必然性と功罪を対象としているとする。そのことを扱っている本——以下、電子書籍でももちろんかまわない——を読ませ、グローバル化の実態を学生たちがどう把握するかを聞いてみる。学生たちがどの程度、どのように、自分の立ち位置——専門的には視座——を自覚して発言しているかどうか、これはある意味で社会調査である。

厳密な社会調査は、対象の範囲を決め、適切なサンプリングをして、適切に質問票で行わなければならないが、たまに科研費を取ったときなどしかに行えない、こうした本格的な調査の前提になるのは、授業時間などにくり返し行い続けている、いわばありふれたブリテストであろう。

社会学の例は、こういう場合の例としては挙げやすく、これはいわば「ずるい例」かもしれないので、多くの異なった専門分野の方たちに考えていただきたいと思う。ただこの場合でも、①テキストとしてある本を取り上げる、②それを読んでこきせて、どう読んだかを聞く、③それについて議論する、というパターンは使えるはずなので、そのことだけは確認しておきた

い。

3. 高度に専門的な教育

これに次いで、教育を研究のために生かすやり方は、自分の研究のために読まなければならない本をテキストに上げ、学生といっしょに読んで議論していくことであろう。学生のなかにはそのテーマについて自分なりにある程度勉強している者もいるし、まったくの素人でも、だからこそ面白い読み方をし、面白い意見を出してくる者もいる。こういうやり方なら、多くの大学教員は抵抗なく、いくらでもできるであろう。

だが、ここでも重要なのは、テキストのある範囲を、学生たちが必ず読んでくる、あるいは読んで来ざるを得ないようなやり方をするのである。そのためには、学生に、たとえばA4一枚に読み取ったことを書いてこさせ、現物を提出させるとともにコピーは手元に残させ、教員がそれらを見ながら、書いてあることの詳細を聞いたり、学生たちの異なった解釈を示して議論させたりすることであろう。やりようによっては、議論は想像以上に盛り上がり、大学教員が引かかっていた疑問への解が見つかったりすることも少なくないかもしれない。

こうして、書き進めてきてあらためて気がつくのだが、私は、半世紀ほど前の大学に学生として入り、大学院に進んで、研究者になり、それを前提に大学教育をしてきた人間の一人である。だから、現在の大学教員の多くが、かなり若い人でも、自分は研究者であり、教育は二次的な仕事だと思っていることが良く理解できる。

しかし、それと同時に、この半世紀間に大学がどの程度どのように変わり、大学教育がどのような意味でどの程度重要になってきたのかをも、身にしみて感じてきた。大学は今や学生に、現代社会にふさわしい高度な教養を身につけさせたいうで、そのうである程度の専門教育を施さなければならないのである。

4. 入門と合成テキスト

本題に戻ろう。

学生たちに高度教養をふまえたある種の専門性を身につけさせるためには、まず、それなりの入門がなければならない。これは、一般教養、共通教養などと呼ばれてきた科目にある方向性を与えたものだと思うが、その内容はなかなか難しい。

社会学に即していうと、いくつかの入門書はあるのだが、どれも自分の考えからすると、なんとか満足できるというほどのものではない。満足するためには自

分で書かざるをえないのだろうと思うが、自分で書いても他の多くの人は満足しないかもしれない。

そうすると、一つの方法としては、どれか一冊の入門書ではなく、いくつかの入門書、あるいは入門書にかぎらずいくつかの本から部分を取ってきて合成する、というのも一つの方法だろう。この方法が、おおくの専門分野では要になるだろうと思うので、とくに強調しておきたい。

5. 専門性の柱と合成テキスト

つぎに必要なのは、それぞれの専門性の柱となるような基本分野である。社会学に例を取ると、社会学の歴史、理論、方法がそれに当たる。それに、ある人は政策を加えたりする。その専門性を社会的にどう生かせるのかを示す分野である。

社会学の歴史についていうと、古くは通史的概説的なものがあり、その後も単数あるいは複数の著者が執筆したものがないわけではないが、とりわけ20世紀の最後の四半世紀以降の変動が激しかったので、それらも視野に入れてまとめられたものはほとんどない。私は、自分自身の視野から19世紀初頭以降現在までの流れをまとめようとしてきているが、いまだに刊行にはいたっていない。この分野については当面、学生に読ませたい古典、それらのもっとも重要な部分を合成してテキストをつくり、それを読ませながら流れを把握させようとする以外にないであろう。

社会学の理論については、「原論」という形でまとめられた試みが、これまでにいくつかある。それらの中に自分で納得できるものがあれば、それを使うのが良いであろう。しかし、社会学ではとくに、理論はけつきよくある立場からのものにならざるをえないので、いくつかの理論からさわりの部分を抜き出してきてテキストを合成し、それぞれの理論によって社会のどの側面がよく見えるのか、社会の全体像とはなんなのか、を考えさせるのがいちばん良いかもしれない。

社会学の方法、とくに調査の種類やデータの扱い方、統計的処理の方法などについては、技術的な面が多いので、いくつかの信頼できるテキストがあり、それらのどれかを使用できる。コンピュータ処理についてもいくつかのソフトがあるので、それらのどれかを使用することができるであろう。

社会政策がほんらい社会学の応用分野であるべきなのかどうかについては、歴史的に論争があったが、今ではそういう経緯にこだわらず、少なくない研究者が他分野からの研究者とともに、協力したり競合したりしている。テキストもいくつかないわけではないが、これもやはり代表的なものを合成したテキストで、学生に考えさせるのがもっとも良いやり方だろう。

6. 専門性の進化とテキスト

専門性の基礎のうえに構築されるさまざまな分野分野については、社会学では、これまでにいろいろな講座が出されているし、家族・性・世代の社会学、都市と地域の社会学、産業と労働の社会学、社会意識と文化の社会学、社会階層と社会移動の社会学など、かつて連字符社会学と呼ばれた中間的専門性についてのテ

キストも少なくないので、自分の社会学に合うかどうかはともかく、それらをうまく使って授業ができる。

ここまで来ると、テキストの内容と自分の社会学との違いを学生に指摘させて、社会的現実には照らしてどちらが妥当かを議論させるような授業もできるであろう。

いずれにしても重要なのは、テキストを確実に読んでこさせて、その内容をどれほど適切に把握しえたかをチェックし、学生側の批判的な解釈も大いに奨励して、議論をとおして教員自身も気がつかなかったような発見を学生とともにしていくことである。経済学のある授業で、講師として呼ばれ、対話をつうじて新しい発見をしていく方法を最初に実践した人は誰かを問い、その方法を何というかを尋ねたら、あとで出させたりアクション・ペーパーのなかで、経済学の授業に哲学が関係あるとは思わなかった、と書いた学生がいた。私にはこれは、日本の教育の現実を思い知らされて、少し胸が痛くなるような「発見」であった。

7. 「白熱教室」が話題になる現実

中間的専門性から2. と3. で述べた本格的専門性へとつなげていくのには、大きな困難はない。だから問題は、入門から専門基礎をへて中間的専門性にいたる範囲の授業を、現代的教養と関連づけながらどのように行うかである。

この点にかんして、数年前から「白熱教室」が、マスコミで取り上げられたこともあって、異常に持ち上げられている。そしてこれも一部では指摘されてきているが、アメリカの大学では普通のこと日本大学の大学では普通でないことこそが、まさに問題なのである。

私の経験からしても、アメリカでは、1960年代の学生反乱を経験していこう、「白熱教室」はずっと当たり前のことになっている。ところが日本では、同年代の大学闘争はそういう方向では実を結ばず、大学から初等教育にまで下降して行われてきた教育の再編は、むしろ高等教育に上昇するほど学生たちを受動的にする方向に働いてきた。

今こそ大学の教員が、日々の教育をつうじて事態の転換を図るべき時なのである。書籍にせよ電子書籍にせよ、学生を能動的にさせる対話型授業のためのテキストは、そうした実践の広がりをとおしてしか生み出されえないから、個々の教員は目的意識をはっきりと持ち、それにふさわしいテキストを合成して、能動的な対話型授業をどんどん展開していくべきである。

8. おわりに

以上に基づいて、私は、当日のプレゼンテーションで、対話型授業の具体的なやり方とそれともなう問題、必要なテキストの合成について大学生協をどこまで生かせるか、を示したいと思う。要点は、大学改革の要は教育改革であること、そこに生協を絡ませて協同の精神を取り込んでいくこと、である。